

## パパディアマンディスの木のイメージ — 『高貴なる樅<sup>1)</sup>の木の下で』を素材にして—

佐藤 りえこ

### 1. はじめに<sup>1)</sup>

近代ギリシア文学に於いて、1800年代は一大転換期であった。1821年のトルコからの独立は、ギリシア精神を覚醒させ、新たな国民文学誕生の契機となった。ギリシア独立以前から繰り返し議論されてきた言語問題、即ち文語である純正語と口語である民衆語のいずれを共通語とするかという論争が、ギリシアの自由化運動の高まりと呼応するかのようにより燃したのも、この時期である。1881年、民衆語推進者のプシハーリス(Γ.Ψυχάρης, 1854-1929)が、『わが旅』(Το ταξίδι μου)を発表し、これが弾みとなって、民衆語が広く支持されていく。文学一特に散文一では、「何を民衆語で描くか」という問題が生じた。作家の目は民衆語の世界、即ちギリシアの田舎やその住民の日常生活や風習へと向けられていく。その結果、浪漫主義的な恋愛小説や歴史小説に代わり、風俗短編小説(ηθογραφικό διήγημα, genre story)が主流になる。本稿で扱うパパディアマンディスは、この社会的な変革期で、尚かつ言語及び文学の変動期でもあった時期に、活躍した作家の一人である。以下にパパディアマンディスの年譜・作風等について簡単に紹介しておきたい。

#### 1.1 作家パパディアマンディスについて

アレクサンドロス・パパディアマンディス(Αλέξανδρος Παπαδιαμάντης)は1851年、スキアソス島(Σκιάθος)でギリシア正教の司祭の息子として生まれる。中学卒業後、一時アトス山の修道院に寄宿する(1872年)。その後アテネに上京して、アテネ大学の哲学部で、国文学及び英文学を学ぶが、経済的理由で、学半ばにして大学を去る。

その後もアテネに留まり、生活と島の両親への仕送りのために、大学在学中から興味があった新聞の文芸担当記者の職を得る。そして新聞や文芸雑誌に、文学評論を書いたり、英語やフランス語で書かれた外国文学を翻訳する傍ら、自作の短編を発表する。こうして書かれた短編小説は 200に亘り、そ

の中には、代表的近代ギリシア文学作家としての評価に値する作品が見られる。

また、執筆活動の傍ら、アテネのアクロポリスの麓にあるブラカ地区のエリセオス教会(προφήτης Ελισσαίος)で聖歌隊に加わり、聖歌唱詠奉仕をする熱心なギリシア正教徒でもあった。終生、経済的に逼迫した生活を送り、1911年、故郷のスキアソス島で死去した。

## 1.2. ババディアマンディスの作風

ババディアマンディスは、数編の中・長編小説と膨大な数に上る短編小説、約40編の外国文学の翻訳を残している。

まず中編・長編小説として、比較的初期の作品の中から『移民の女』(Η Μετανάστις, 1879)、『諸国の商人達』(Οι Έμποροι των Εθνών, 1882)、『ジブシー娘』(Η Γυφτοπούλα, 1884)、『キリストス・ミリオニス』(Χρήστος Μιλιόνης, 1885)の4編が挙げられる。いずれも筋の展開に飛躍が多く、作品としてのまとまりに欠けるという点が指摘されている。後期(1900年代)の作品の中で、ババディアマンディスの代表作の一つとされる中編小説『殺しをした女』(Η Φόνισσα, 1903)がある。この作品には、1898年にババディアマンディスが翻訳したF.ドストエフスキーの『罪と罰』の影響が大きいと言われ、善良な人間が犯す罪が冷静な筆致で描かれている。

風俗作家の本領は、短編小説に於いて発揮される。作品には、ババディアマンディスの故郷スキアソス島の自然や風景、島民の姿が織り込まれている。アテネで執筆活動を続けるババディアマンディスの脳裏には、少年期を過ごしたスキアソス島が、原風景として存在し、作品の舞台として、或いは島への郷愁となって作品に再現されている。(『懐郷病(ホームシック)の女』(Η Νοσταλγός, 1894)・『波間の夢』(Όνειρο στο κύμα, 1900))

更に、ババディアマンディスの短編小説のもう一つの特徴として、ギリシア正教的要素を指摘することができる。クリスマスや復活祭などのギリシア正教に基づく行事を題材にした作品が数多いほか、しばしば作品発表を行事の時季に合わせて行ったり、聖書や聖歌から好んで語句を引用した。(『クリスマスのパン』(Χριστόψομο, 1887)・『復活祭の聖歌隊』(Λαμπριάτικος ψάλτης, 1893))

また、ギリシア神話や民間伝承をモチーフにした作品や、キリスト教以前の異教信仰にヒントを得た作品も多く残されている。(『妖霊に取り憑かれた橋』(Η Στοιχειωμένη Καμάρα, 1904))

### 1.3. パパディアマンディスの評価

パパディアマンディスに対する評価は二分している。脱線や飛躍、唐突な結末など、作品一特に長編小説一の展開上の欠点や、単調に繰り返されるモチーフの言い換え、型にはまったテーマなどに対する厳しい否定的な評価がある一方で、庶民の生活を観察する分析的かつ温かい目と、風化しつつある風習やギリシア人の精神性を描き出そうとした姿勢は、高く評価されている。

### 1.4. 外国文学の影響

パパディアマンディスは、英米・ロシア文学を、英語やフランス語からギリシア語に翻訳、紹介している。その中には、M. トウエイン、A. ドーデ、G. モーパッサンの短編小説が見られる。フランス語からの重訳で、F. ドストエフスキーやI. ツルゲーネフの翻訳もある。こうした翻訳活動を通して受けた影響は、比較文学研究の分野で明らかになりつつある。

### 1.5. パパディアマンディスの言語

2.に移る前に、パパディアマンディスの言語について触れておきたい。1800年代後半のプシハリスを中心とした民衆語推進運動の最中、パパディアマンディスは、独自の言語を使用した。地の部分では、純正語（文語）—正確には、パパディアマンディスに特徴的な混合語（民衆語の要素を取り入れた文語）—を、会話部分では、スキアソス島の方言を中心とした民衆語を用いた。ギリシア正教に関わる事項や、ギリシア精神を描くには、純正語が適していた。また、民衆語で生き生きと描き出された一般庶民の姿は、読者に共感を与えた。

## 2. 短編小説『高貴なる榿の木の下で』について

『高貴なる榿の木の下で』（*Υπό την βασιλικήν δρυν*）は、1901年文芸誌『パナシネア』（*Παναθηναϊα*）に発表された<sup>3)</sup>。自然を描くパパディアマンディスの好編の一つである。本稿では、トリアンダフィロブロス（N. Δ. Τριανταφυλλόπουλος）校訂の全集に収められたものをテキストに用いた。尚、引用に際して、テキストから引用する場合は【】で、テキスト以外の文献から引用する場合は<>で頁数を示した。またテキスト引用箇所訳は、筆者によるものである。

## 2.1. 作品のあらすじ

作品は、主人公の「私」が少年期を回想するという設定で、一人称の語りで展開していく。

「春の祭」（復活祭、聖ゲオルギオス祭、5月1日祭、聖コンスタンディノス・エレニ祭、聖ヨアンニス祭）の時季になると、少年は両親に連れられ、ロバの引く荷車で、親類知人が住む山間の村メガ・マンドリ（Μέγα Μανδρί：「大きな小屋」という意味）へ出かけるのが常であった。メガ・マンドリへの道中、山の斜面にそびえるように立つ一本の壮麗な檜の大木が見える。作品はこの檜の木の描写から始まる。

檜の木は少年を魅了し、間近へ引き寄せようとするかのようにだった。木の辺りを通過するとき、少年はいつも木を飽くことなく眺めていたいと願うのだった。木は少年の初恋の相手であったのだ。

186年<sup>1)</sup>のある春の日、主人公である11歳の少年（私）は、檜の下で奇妙な体験をする。

いつもと変わらず復活祭を祝うため、少年は両親とメガ・マンドリに出かけた。問題の木が見えてくると、少年は言いようもない感覚に捕らわれる。車から飛び降りて憧れの木の元へ駆け行き、その太い幹を両腕に抱えてしまいたい衝動に駆られるのだった。少年一行が進むにつれて、木は様々な表情を少年に見せる。しかし道連れがある道中のこと、道を外れて木のある高所へ行くという事を、両親が許すはずなどなかった。少年の願いは叶わなかった。

復活祭の前の土曜日（聖土曜日）の早朝、教会の礼拝式を少年はこっそりと抜け出し、恋しい木の元へと向かう。檜の木へと通じる道は、所々に茨や藪のある険しい登り坂だが、少年には知れた道である。少年に先んじて数名の羊飼いが、この道を町へと出かけていった。羊やチーズを売って日用品を買ってくるためだが、戻るのは夕方のはずであった。早朝のために人に出会う心配もない。しかし、こうした少年の予想を裏切るかのように、件の羊飼いたちの姿が道の向こうに見えるではないか。復活祭を村の親族と一緒に祝おうと、早めに戻って来たのだった。少年は慌てて身を隠す。礼拝を抜け出したことを、両親に知られたくなかったからだ。幸い一行は通り過ぎて行き、少年には気づかなかった。ところが、少年は動揺から道を誤ってしまう。息急切って着いたのは山頂であった。見下ろすと、少し下ったところに木が見えた。少年は、木が間違いから救い出し、正しい道を示してくれたのだと思った。

岩の裂け目を飛び越え、茨に足を裂かれながら道を下り、木のある所へ辿

り着く。息を切らし汗でぐっしょりと濡れた少年は、前夜檜の木について空想をめぐらし眠れないでいたため、疲労感と眠気をおぼえ、深紅のひなげしや野の花の咲き乱れる木蔭に、身を横たえる。そこで少年は夢をみる。夢には木が現れるのだが、見ている間に少しずつ形が変わっていく。木はもはや木ではなく、一人の女性へと変わる。それは日頃のたわいない少年の空想が、夢の中で具現されたかのようであった。「ああ、木なんかじゃない。目に見える木という木は、みんな女だ。」夢から醒めやらないでいる少年は、宗教の時間に聞いたキリストに目を癒してもらった人の言葉「はじめは人が木のごとくに見えた。それからはっきりと見えた」をぼんやり思い出した。夢が醒める直前に「女」は少年に言った。「私を哀れんで、切り倒さぬよう言いなさい。...私が悪き業を為さぬように。...私は不死の妖精ではないのです。この木と共に...」

そこで少年は目覚め、恐ろしくなって逃げ出す。既に正午になっていた。太陽は頭上に照っていた。山の反対側で、少年を呼ぶ羊飼いの声が聞こえてきた。羊飼いは、少年を見つけると、少年の父親が心配して探していると叫んだ。

少年は夢の御告げのことは何も分からなかった。後に、神話を扱った本でハマドリュアス(Ἡμαδρυάς・別称ドリユアス Δρυάς)というニンフは檜の木に住み木と共に一生を終えるということを知った。

多くの年月が流れた。外国から戻った主人公(私)は、少年時代の思い出の場所を「巡礼」する。しかし、檜の木も木があった場所も、見あたらなかった。主人公の問に、一人の老女が答えた。木を切り倒したのはヴァルゲニスという男で、木を切った後、しばらくして病にかかり死んでしまったという。「あの巨樹(Το Μεγάλο Δέντρο)には、妖霊が住んでいたんじゃ。」という老女の言葉でこの作品は終わる。

## 2.2. 檜の木について

ナラ・カシ・カシワ・クヌギなどの種類に分かれるオークは、ヨーロッパでは、「木の王」「森の王」として、樹霊信仰の崇拝の対象であり、長寿、王者の威厳を表す<sup>7)</sup>。またギリシア神話の檜は、ゼウス神の聖木である。エピロス山中のゼウス神託所トドナでは、ゼウス神が、神木の檜の葉が風にそよぐ音で、神託を下したとされる<sup>8)</sup>。

1965年出版の事典<sup>7)</sup>のδρυόςの項には、檜は、ギリシアの森林総面積の約40パーセントを占め、木炭や家畜の飼料、皮なめしなどに用いられる木であると記されている。おそらく、ババディアマンデイスが『高貴なる檜の木の下

で』を書いた頃は、森林破壊が進む今以上に、樫はギリシア人が触れる機会が多い木の一つであったらしい。

### 2.3. 『高貴なる樫の木の下で』についての従来の研究

従来のババディアマンディイス研究に於いて、『高貴なる樫の木の下で』は、いかなる角度から分析され、どのように解釈されているかを、ここで整理したい。膨大なババディアマンディイス研究の中で、『高貴なる樫の木の下で』に関する研究は、比較的少なかった。従って、『高貴なる樫の木の下で』は、近年になって注目されるようになった作品であると言えよう。

#### 2.3.1. セメリス(Γ.Θεμέλης)<sup>1)</sup>の研究

セメリスは、作品に見られるギリシア正教的要素と、異教趣味的モチーフの関係を、次のように解釈している。

少年には、風に揺れる樫の葉擦れの音が、聖歌の一節「大いなるかな…」(ως μεγαλύθη…)を歌うように聞こえる【327】という描写から、樫は神のような世界の中心的存在であり、木の葉の音は神の威厳の輝かしい表出であると捉えられる<17>。一方、樹に宿る妖霊(το στοιχειό του δέντρου)ハマドリュアスを少年の夢に登場させたのは、ババディアマンディイス自身の少年時代の体験に基づき描かれた幻想的世界に、ギリシアの民俗色(ελληνικό λαϊκό χρώμα)を与えるためであった<17>。それ故、樫は、ギリシアに見られる異教的色彩を兼ね備えるギリシア正教の神的な存在であり、同時に、ババディアマンディイスの実体験から生み出された一つの「現実」でもあると言える<18>。

#### 2.3.2. マクリッジ(P.Mackridge)<sup>2)</sup>の研究

マクリッジは、『高貴なる樫の木の下で』を含むババディアマンディイスの1887年以降に書かれた9編<sup>10)</sup>をテキストに、場面描写に見られる特徴を分析して、次のような結論を導きだした。

9編を通して、舞台設定に場所の指示はない。場面は20~30年前の祭の時に設定されている。ババディアマンディイスの祭の詳細な記述は、読者にひと昔前の祭の頃に、何が起こったかを想起させ、その思い出につながる場所に読者を導く。即ち、祭は時間を指示するだけではなく、記憶の中에서도再訪できる場所も示している<161>。

『高貴なる樫の木の下で』では、春の祭の描写から連想される「場所」に、その「場所(風景)」を特徴づける樫の木と、その「場所に取り憑いた妖霊

(το στοιχείο του τόπου / genius loci) とが置かれ、妖霊が「場所」から切り離されると、何が起こったかが描かれている<156/163>。

### 2.3.3. リックス(D.Ricks)<sup>11)</sup>の研究

リックスは、ババディアマンディスに見られるギリシア正教と異教信仰との関係について、作品だけでなく、異教信仰につながるいくつかの語彙を分析し、上述のセメリスとは異なる指摘をしている。

ババディアマンディスは、今日のギリシア正教の中に、古代の異教思想が生き残っており、また、「土地」に神聖さが宿り続けていることに気付いた作家である。そして、このような異教的要素が多くの作品の着想になっている<sup>12)</sup><169/179>。

『高貴なる榿の木の下で』の冒頭部分

--少年だった私は、復活祭や聖ヨルゴス祭、五月祭の時、農村の祭を楽しむために、ロバの背に揺られて、あの辺りへ出かけるのだった。そんな時、厳麗で、孤高の、そして巨大な一本の高貴な榿の木に飽きてしまうことなんてないとうっとりと思ったものだった。【327】

には、異教信仰とキリスト教が並置されている。少年と榿との関係は、木の描写に用いられた比喻と、文法性が異なる語彙使用による「木」の性の転換により、徐々に性的なものになっていく。「榿の木は、私の子供時代の初恋の人だった」【329】という箇所から、異教信仰が、人間の魂の中に存在する一種の衝動として捉えられる。即ち、恋する榿の木を求めて教会から失踪した少年の行動は、異教信仰の個人的なジェスチャー(a private gesture of paganism)といえる。

また、「あの巨樹は取り憑かれていたのだ」【331】という物語の最後の老女の言葉は、作品の結末を曖昧にしている。つまりババディアマンディスは、ある場所には、何か神聖なものがあるのではないかという思春期に感じた感覚をもち続けることができた反面、その描き方は、全く主観的である。『高貴なる榿の木の下で』には、ババディアマンディスの一面であるアイロニーを看取できる<177>。

### 2.3.4. ファリヌ-マラマタリ(Γ.Φαρίνου-Μαλαματάρη)<sup>13)</sup>の研究

ファリヌ-マラマタリは、ババディアマンディスの叙述(ナレーション)の技法を、多角的に分析している。『高貴なる榿の木の下で』の描写技法の特徴を整理し、作品を「叙述の冒険」として、読むことができると述べている<282>。

作品は、内容と描写の特徴により、大きく三つの段落に分けられる。

第一部では、木が三段階に分けて描かれる。まず、「幹・枝・葉 (κλάδι-κλώνες-φύλλα)」【327】 というように、木の三つの部位が、並んで描かれる<sup>14)</sup>。次に、木の属性が、「鷹の横顔のように曲がった(枝)」【327】のような直喩で表される。そして最後に木は、「樅の森の女王(άνασσα του δρυμού)」【327】などの隠喩で描かれる。無生物から非人間的存在、そして人間へという樅の木の段階的な描写に見られる王者の風格や神聖さを表す語彙により、樅は、生命と知のシンボルとなる。第二部にも、同様の描写技法が見られる。

第三部に於いて、樅が象徴する「生」は、少年の恋心に現れる。一方、もう一つのイメージ「知」は、道順を誤った少年を正しく導く道標としての樅と関連づけられる。木が女へと変身する場面の描写は、経験の現実性と神話(μύθος)とを、知識としてではなく実体験として、感覚的に結合させることができるという幼年期の能力を表している。

更に、作品の叙述全体に見られる「過去／現在」「楽園／失楽園」「生／死」などの二項対立の構造は、作品の主題である幼年期の豊かさと、成年期の不完全さの対比を、明らかにしている。そして、第一部に於けるシンボル化の叙述技法は、物語の失われた時間を、シンボルの永遠性(αχρονικότητα)で復元するという「叙述の試み」と言えよう<285>。

### 2.3.5. ベッカム(R.S. Peckham)<sup>15)</sup>の研究

ベッカムは、『高貴なる樅の木の下で』の樅をはじめ、パバディアマンデイスの後期(1900年代)の作品に見られる木の意味を、多角的な観点から検討し、示唆に富む考察を行っている<sup>16)</sup>。本稿の考察(3.を参照)は、上述のファリヌ-マラマタリとベッカムの両研究に、負うところが大きい。

ベッカムは、『高貴なる樅の木の下で』の語り手が少年だった頃(1800年代半ば)から、作品が発表された1901年までの期間、即ち19世紀後半に、ギリシアで起きた社会的な問題や、歴史的な事件と、作品との関連を分析し、次のような結論を導いた。

ギリシアの森林破壊は、オトーン一世による君主制が始まった頃(1833年)から既に深刻化しており、『高貴なる樅の木の下で』の発表と同時期の新聞紙上では、森林破壊に関する諸問題が盛んに報じられた。パバディアマンデイスの1903年の作品『アリヴァニストス』(Αλιβανίστος)には、深い森の描写に続き、「幸いなのは、森に霊が宿ると信じられていることだ。そうじゃなければ、伐採の大斧が、森を破壊していただろうよ。」という叙述がある。



このように、ババディアマンディスの作品には、当時の新聞や雑誌、書物で論じられる問題に寄せる作家の関心が、現れていると言える<150>。

『高貴なる榲の木の下面で』に於いて、榲の伐採が表す「移動と根絶」というテーマー外国へ出ていた主人公（私）が、昔の場所へ戻ってみるが、思い出につながるものは何もなかった一は、19世紀後半、出稼ぎに海外へギリシア人が行き、これによる人口変動が、社会的不安を生んだことと関連付けられる。また、榲の破滅は、ある生き方の終末を象徴すると同時に、榲の描写に頻用される形容詞「高貴なる(Βασιλική:字義「王の、王たる」)」と、186年という年代【328】から、1862年のオトン一世の失脚・国外追放という歴史上の事件を示しているとも考えられる<152>。

このようにベッカムは、社会的・歴史的な枠組みの中で、榲の木の意味を分析した。また更に、『高貴なる榲の木の下面で』に見られる榲、主人公、メガ・マンドリ（少年が所属する集団としての村）の三者間の関係は、「高低」「上下」「遠近」など空間的位置関係を指示する語彙や、「個／集団」「可視／不可視」などの対立する概念によって、明らかになると述べている<153-154>。即ち、人間社会の階層を象徴する榲は、高所にある孤立した異教の世界の主であり、低地にある教会を中心とした集団であるメガ・マンドリと、対立する関係にある。そして、少年の目に映る榲の描写から看取される三者の空間的・心理的な相互関係の中に、榲がメガ・マンドリの一員である少年を誘惑するが、最終的には、メガ・マンドリの成員に伐採されるという作品の全体的な構図を、捉えることができる。

### 3. ババディアマンディスの木のイメージ

2.3.で整理した諸研究から、『高貴なる榲の木の下面で』には、多様な解釈が可能であり、それ故、榲のイメージは多面的であると言えるだろう。3.では、まず榲及び榲がある場所の描写(3.1.)、榲と少年の距離(3.2.)、時間設定(3.3.)、夢とその解釈(3.4.)について再検討し、木のイメージと伐採の意味(3.5.)について考えてみたい。

#### 3.1. 榲と榲がある場所の描写

##### (1) 榲の描写

作品の冒頭で、榲の属性は、「壮麗な(περικαλλές)」「孤高の(μεμονωμένον)」「巨大な(πελώριον)」「高貴な(βασιλικήν)」という形容詞で表現されている。また、木の各部位は、「深い緑の、はち切れんばかりの(κατάμε-

στοι) 力強い(κραταιοί)枝」「まるで鷲の横顔のように(ως η κατατομή του αετού)曲がりくねり(γαμφοί)、まるで獅子の鬣(たてがみ)のように(ως η χαίτη του λέοντος)渦巻く(ούλοι)小枝が、王冠の中で、天に突き出ていた」という直喩で表される。このような檜の描写は、ババディアマンディスに特徴的なものではなく、ヨーロッパの他の文学にも見られる<sup>17)</sup>。一方、「檜の森の主(άνασσα του δρυμού: άνασσα f.)」「野生美の乙女(δέσπονα αγρίας καλλονής)」「清気の女王(βασιλίτσα της δρόσου)」などの隠喩は、少年にとって、檜が異性の理想的な存在であることを表している。

洋の東西を問わず、民話や伝承には、樹霊が人間を誘惑するとき、異性の姿で現れるというモチーフがある<sup>18)</sup>。ババディアマンディスの檜の女性的なイメージも、民話・伝承に通じているといえるだろう。しかし、また同時に、処女のイメージで描かれる木が、少年を「うっとりさせ、魅了し、引き寄せる【327/328】」のは、少年の空想の中であることから、ここに思春期に特有な自己陶酔的な要素があるともいえるだろう。少年は、空想の中で、理想的な処女を想い描くことで、憧憬の対象から選ばれて、その傍らに立つ自分の姿を想像していると考えられないだろうか。換言すれば、檜の女性的なイメージは、少年の自己陶酔から生まれた視覚的・聴覚的心像とも言えるのではないかと思われる。

## (2) 檜がある場所の描写

檜がある場所、或いはその場所の意味は、2.3.の諸研究に於いて、「少年時代の思い出の礼拝所(τα προσκυνητήρια)【331】としての神聖な場であり、低地にあるキリスト教社会に対抗する高台の異教信仰の場でもあると解釈されている。

メガ・マンドリを見下ろす高台の檜の木がある場所を、少年の空想の世界につながる領域だとすると、その中核となる檜の周りには、木蔭というもう一つの小世界がある。少年は、空想の中で、「もし(木が)僕を受け入れず、その軀から僕を振り落とすなら、そしたら落ちて、その縁の中をころげ回り、その蔭に身を寄せよう(να στεγασθώ υπό την σκιάν της)【328】と想う。また、早朝、少年が檜の木を訪れた時、「巨きな木の蔭の中(εις την σκιάν του πελωρίου δένδρου)【330】で、少年は夢を見る。その木蔭は、咲き乱れるひなげしで、深紅の色(εν μέσω των μηκώνων του των κατακόκκινων)【330】をしていた。ここで、檜の木の豊かな枝が真っ赤な野の花の上に投じる木蔭が、少年を予兆的な夢へと導く「異界」として、捉えられられるのではないだろうか。更に、夢から醒めた少年が、恐くなって逃げ出すとき、檜は、高く照る正午の太陽により、「通り抜けられない蔭(σκιά αδιαπέρασ-

τος) 【331】となる。もはや、榿の木蔭は、少年が再び入ることのできない闇に閉じた世界に変わってしまったのではないかと考えられる。

### 3.2. 榿と少年の距離

少年は、「ロバの背から飛び降り、木の元へ駆けていき」「その幹に抱きつき、接吻し」、「心行くまで榿の木を楽しみたい」と、空想の中で祈願し【327】、夜通し夢にうつつに榿を慕う【329】。しかし、木の側に到着すると、「草の上に身を投げだし」、「たくましい枝を見上げ」、「樹の息吹、葉擦れの中で、呑み込むように息をする」【330】が、木に指を触れはしない<sup>19)</sup>。このことから、榿と少年との間には、接触することのない距離があり、榿は、少年が実際に触れることがない、或いは触れられない存在であると指摘できよう。

### 3.3. 時間設定

作品の舞台は、復活祭を祝う山間の村である。ギリシアでは、一般的に、クリスマスよりも復活祭を盛大に祝う。作品には、陽気で愉快的祭の情景が描かれており【328】少年時代の楽しい思い出を彩っている。しかし、ここで、少年が榿の木の前へ出かけたのは、復活日の前日の聖土曜日(Μεγάλο Σαββάτο)であったことに注目したい。聖土曜日の早朝、教会では、キリストの復活と人間の救済を妨げんとする悪魔を追い払うため、「主よ、甦り給え」と口々に叫びながら、月桂樹の葉を撒く【329】<sup>20)</sup>。キリストの「死」からその「甦り」と「救い」を希求する日である。

更に、3.1.(2)で考察した榿の木蔭には、ひなげしの赤い色と、蔭の黒い色が対照的に用いられている。この二色を、聖土曜日という時間設定の中に置くと、「赤」は、キリストの血につながる色で、死と再生の両方のイメージをもつものに対して、「黒」は死を暗示する色であると捉えることができる。

### 3.4. 夢とその解釈

榿は、少年の夢の中に乙女の姿で現れる。少年は、「ああ、木なんかじゃない。女の子(κόρη sg.)だ。目に見える木という木は、女(γυναίκες pl.)なのだ。」と思う【330】。また、ベトサイダで盲人をいやしたキリストのはなし(マルコ 8:24-25)<sup>21)</sup>が、思い出される。この聖書からの引用を、次に挙げる。(下線部は、筆者による。)

イエスは盲人の手をとって、村の外に連れだし、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。すると盲人

は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが、よく分かります。」そこでイエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきりと見えるようになった。<sup>22)</sup>

聖書からの引用と、少年の考えとを対比してみると、聖書は、イエスの最初のいやしで、盲人は、人が木のように見え（下線部を参照）、二度目のいやしで、はっきりと見えるようになったとするのに対し、少年は、「木は、女だ」と思う。パバディアマンディスが夢の場面に、聖書からの引用を行ったのは、夢に現れた乙女は、未だはっきりとは見えない目で見えた像であることを、示唆するためではないかと思われる。

夢の中で、「乙女」は、「樹を切り倒してしまわないように」と、少年に「救済」を求める。しかし少年は、この予兆的な夢が何を意味するのか分からなかった【331】。後に、神話の本から樹霊ハマドリユアスについて知るのだが、本から得た知識と夢とを関連づけてはいない。また、樫を伐採したヴァルゲニスの死が、樹霊の仕業であると解釈したのは、村に住む老女であり、壮年の主人公ではない。

作品の結末は、2.3.3.でリックスが指摘したように、中途半端な印象を与える。これは、主人公による夢解きが行われず、樫の伐採に纏わる一連の出来事が、第三者（老女）によって語られていることに因る。このような主人公の「沈黙」は、夢が不可解なままに置かれていることを意味するとも、また神話的、民間信仰的解釈に対するパバディアマンディスの立場が、肯定、或いは、否定の両方の解釈ができるとも、考えられる。

### 3.5. 木のイメージと伐採の意味

これまでの考察をここで整理したい。『高貴なる樫の木の下で』に於ける樫の木は、少年の空想の中核にあり、少年にとってあらゆる正のイメージで表される。また、樫の木がある高台は、到達可能な場所であるが、その木蔭は一種の異界をなし、木自体は、触れられない、或いは実体のない存在でもある。「死」からの甦りを待つ日、或いは芽生えの時季、少年にとって永遠の存在であるはずの木が、夢の中で、その「死」を予告し、助けを求める。ここに、少年の幻想世界は崩壊し、少年の目が現実に対して、開かれる。木が不死身ではないという現実が、少年に突きつけられる。

主人公が、少年時代の空想の世界につながる場所を離れ、知識を得て、現実を生きたその後の経緯は、作品に描かれていない。唯一、木の伐採により、予兆的な夢が、現実の「事実」となったことだけが描かれている。キリスト

の死の意味を信じ、また死という命あるものの避けられない現実を知るババディアマンディスが、作品の最後に語ろうとしたのは、人は、木の中に、永遠の生を感じることでできるが、しかし同時に、木も人間も死にゆく運命にあるという現実が存在するという矛盾ではないかと思われる。

#### 4. おわりに

ギリシアは、夏の間中、雨が降らず、従って山火事が頻繁に生じる。近年、宅地開発が目的で、人為的に起こる山火事が、問題になっている。ババディアマンディスが『高貴なる榿の木の下で』を執筆した当時、耕作地の開拓で、森林が伐採されていった状況に、よく似ている。情け容赦なく、大斧を振るい榿を切り倒したヴァルゲニスが、どんな人間であったかについて、ババディアマンディスは、その死以外には、何も触れていない。世界的規模で確実に、自然破壊が進む現在、このヴァルゲニスの死が、ババディアマンディスによる警鐘であるような気がしてならない。

#### テキスト

*Ἄπαντα Ἀλέξ. Παπαδιαμάντη* (ed. N. Δ. Τριανταφυλλόπουλος, Athens 1981-1988) vol. 3 pp. 327-331

#### 翻訳

Alexandre Papadiamantis : *Sous le chêne royal L'Amour dans la neige* (trad. René Bouchet Athens 1992 pp. 37-43)

#### 参考文献

- 植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』早稲田大学出版部 1985  
神野善治「船霊と樹霊 - 船霊信仰の研究 - 」『沼津市博物館紀要』10.  
(1986) p. 1-35  
N. スポロノス (西村六郎訳) 『近代ギリシア史』白水社 1988  
J. E. ハリソン (佐々木理訳) 『古代芸術と祭式』筑摩叢書 1964  
上記以外の参考文献は、註の中で紹介した。

## 註

- 1) 原題の *δρῦς* (英語訳 oak, フランス語訳 *chêne*.) は日本語のカシ・カシワ・ナラに対応する。ここでは安田喜憲著『森と文明の物語』(ちくま新書 1995 pp.113-131) を参考に、*δρῦς* を「榿」と訳すことにした。
- 2) 各項目を整理する際に次の文献を参考にした。

*Δημαράς, Κ.Θ.: Ιστορία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* (Athens 1985)  
*Κατσιμάλης, Γ.Κ.: Αλ. Παπαδιαμάντης* (Athens 1991)  
*Μιρασογιάννη, Μ.: Νεοελληνική Λογοτεχνία vol.2* (Athens 1982)  
*Μουλλάς, Π.: Αλ. Παπαδιαμάντης αυτοβιογραφούμενος* (Athens 1982)  
*Πολίτης, Α.: Ιστορία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* (Athens 1985)  
*Χατζηφώτης, Ι.Π.: Παπαδιαμάντης Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας vol.11* (Athens)  
*Vitti, Μ.: Ιστορία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* (Athens 1987)  
*: Ιδεολογική Λειτουργία της Ελληνικής Ηθογραφίας* (Athens 1991)

 関本至 「近代ギリシア文学について」『現代ギリシアの言語と文学』(溪水社 1989 pp.196-221)
- 3) *Άπαντα* vol.3 p.684
- 4) *ibid.* p.328註
- 5) 山下圭一郎『イメージの博物館』(大修館書店 1988 p.188/175)
- 6) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店 1988 p.141/173)
- 7) *Κορρές, Σ.Γ.: Πάπυρος Δίτομον Επιτραπέζιον και Γλωσσικόν Λεξικόν* (Athens 1965)
- 8) *Θεμέλης, Γ.: Ο Παπαδιαμάντης και ο κόσμος του* (1961 Thessaloniki pp.12-27)
- 9) *Mackridge, P.: The textualization of Place in Greece Fiction JMS* (1992 vol.2 no.2 pp.148-168)
- 10) 『高貴なる榿の木の下で』以外の8編は、次の通りである。

*Η Μαυρομαπητηλού*(1891), *Στο Χριστό, στο Κάστρο*(1892), *Ο σημαδιακός* (1889), *Ολόγυρα στη λίμνη/Αγι - Αναστασιά*(1892), *Η Φαρμακολύτρα/Τα δαιμόνια στο ρέμμα*(1900), *Νεκράνθεμα*(1907).
- 11) *Ricks, D.: Papadiamantis, Paganism and the Sanctity of place JMS* (1992 vol.2 no.2 pp.169-182)
- 12) *ibid.* p.179 the survival in the the (threatened) Orthodox present of the ancient *parva religio*

ラテン語の *parva religio* の字義は「小さな、(或いは劣った) 迷信的感情」であるが、この語句を含む下線部が、別の箇所では *the pagan past in the present*(p.169) という表現で言い換えてあり、本稿の訳はこれに従った。

- 13) Φαρίνου - Μαλαματάρη, Γ.: *Αφηγηματικές Τέχνες στον Αλ. Παπαδιαμάντη* (Athens 1987 pp.282-285)
- 14) 別の箇所に、「木・幹・枝(δένδρον-κλάδι-κλώνες)」「木・葉・樹脂(δένδρον-φύλλα-οποί)」という組み合わせも出てくる。
- 15) Peckham, R.S.: *Ο Παπαδιαμάντης και η έννοια του δένδρου Ελληνικά* (1994 no.1 (?) pp.147-157)
- 16) 2.で紹介した研究を含む『高貴なる樫の木の下で』に関する論考の概要が、*ibid.* pp.147-151 に挙げてある。
- 17) 例えば、19世紀前半のドイツの詩人F.ヘルダーリンの詩「樫の木」の中に次のような一節がある。(谷口幸男他著『ヨーロッパの森から』NHKブックス 1981 pp.89-98 生野幸吉訳)  
そして君らはすすすすそして力づよい根から楽しげにそそりでて、/肩を競って成長し、鷺が獲物をつかむよう、/たくましい腕を伸べて空をつかみ、雲に向かっては、/陽をあびる樹冠を大きく晴れやかにさしのべる。
- 18) 益田勝実編『南方熊楠随筆集』「巨樹の翁の話」(ちくま学芸文庫 1994 pp.97-129)
- 19) これは、Peckham *ibid.* p.156にも指摘されている。
- 20) Μέγας, Γ.Α.: *Ελληνικές γιορτές και έθιμα της λαϊκής λατρείας* (Athens 1992 pp.170-173)
- 21) Τριανταφυλλόπουλος *ibid.* pp.331
- 22) 『聖書(新共同訳)』 日本聖書協会 (1991) p.(新) 77より引用。

## 付記

本稿を執筆するにあたり、広島大学総合科学部教水島裕雅先生に、貴重なご助言をいただいた。また、ギリシアの植物について、アテネに住む友人の Πόπη Πέτρουさんと、Κατερίνα Δημητρακάκηさんにお世話になった。ここに記して、感謝します。